

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03053

研究課題名（和文）20世紀の日本・イタリア・バチカンにおける民間所在資料や地方公文書の管理

研究課題名（英文）Administration for Non-State-Owned Archives in Japan, Italy and the Vatican in the Twentieth Century

研究代表者

湯上 良（YUGAMI, Ryo）

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授

研究者番号：30772363

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：第一次世界大戦後のイタリアやバチカンでは、19世紀後半のイタリア統一期前後のアーカイブズが危機的状況に陥っていた。紆余曲折を経てイタリアでは、1939年に国有以外のアーカイブズの保護を担当する文書保護局が設立された。バチカンでも多数の教皇庁関係者がイタリアの「古文書学校」に通学し、バチカン側に古文書学校が設立されると、イタリア側からも教壇に立つ者が現れるなど、早くから交流が存在した。一方、日本では、戦中にイタリア人宣教師のマレガが臼杵藩の藩庁文書を中心に当時の民間所在資料の保護を行ったが、本格的な保護の施策は、戦後に開始されたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究では、文書保護局が本格的に活動するのは、第二次世界大戦後とされてきた。一方で本研究では、1939年に設立された同局の活動につき、大戦前後の一次史料から明らかにした。当時、各地の国立文書館の体制強化のため、国立文書館分館の設置準備が進められた。その際、人材の選抜や調整などに文書保護局が積極的に関わっていた。また、被災する可能性のあるアーカイブズの疎開にも従事した。さらに、20世紀以前から現在に至る長期的視点でも民間所在資料関連の制度や政策を明らかにした。欧州の近世期に端を発する集約的な情報管理の歴史を経て、近代的なアーカイブズ管理やアーキビスト養成の起源に至る流れを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：After World War I, in Italy and the Vatican, the archives succeeded from the time of Italian unification in the late 19th century were in crisis. After some struggles, in Italy, the the Soprintendenza Archivistica was established in 1939, which was responsible for the protection of non-state-owned archives. Many Vatican officials also attended the Italian 'School of Archives', and when the Vatican established its own school of archives, there were people from the Italian side teaching there as well, so exchanges existed from early on. On the other hand, in Japan, the Italian missionary Marega during World War II protected the documents of the Usuki domain, but the research clarified that the authentic protection had been initiated after the war.

研究分野：ヨーロッパ史、アーカイブズ史

キーワード：日本 イタリア バチカン アーカイブズ 文書・図書保護局 民間所在資料 地方公文書 文書管理

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景 民間所在資料は、一族アーカイブズや旧領主の文書、企業アーカイブズなど、多様なものから構成され、その保護にあたっては私有権との関係をどう整理するかなど、課題が非常に多い。1920年代のイタリアでは、イタリア王国統一から半世紀以上が経過し、統一以前や統一期のアーカイブズ管理の問題に直面していた。それ以前から続いていた専門家の議論を経て、大学教育の場でアーカイブズ学の講座が開講し、私有アーカイブズを用いた研究を行う歴史家からも保護に関する具体的な提案が行われた。長年の議論の積み重ねが1930年代当時のファシズム政権の制度設計に作用し、1939年には、国立文書館で国の機関が作成した公文書を保存するという、それまでの限定された管理方針から転換することになった。保護の対象を民間所在資料や地方公共団体の公文書にまで広げ、文書の価値にもとづき調査や保護を行う文書保護局という新しい機関が各地に設立された。現在この機関は、災害やテロなどが起きた際に文書の救出作業を行い、民間所在の文書が散逸や売却の危機に晒された場合、事前の保護活動にも従事する(湯上良「世界のアーカイブズ 2. イタリア」『アーカイブズ学要論』2014年)。

1929年にイタリア王国とローマ教皇庁との間でラテラノ条約が結ばれ、バチカン市国が成立した。この条約の一環で政教協約が結ばれ、イタリア王国内にも存在する宗務団体関連のアーカイブズ保存に関する取り決めもなされた。さらに1930年代には、教皇庁においても所蔵アーカイブズの調査と保護に関するプロジェクトが開始され、両国とも民間所在や地方公共団体の公文書を含むアーカイブズ保護の施策が活発に行われた(Ugo Falcone, *Gli archivi e l'archivistica nell'Italia fascista, Storia, teoria e legislazione*, 2006)。

一方、日本の戦前期のアーカイブズ管理については、欧米のアーカイブズ管理の動向に着目しながらも、閉鎖的な官僚制度の下、記録を開示しようとしめない傾向にあり(安藤正人・青山英幸編『記録資料の管理と文書館』1996年)民間所在資料や地方公共団体の公文書に関しては、散逸の危機に晒されていた。特に旧幕藩体制下で作成された文書は、売却されるものもあり、マレガ神父が収集した文書の事例もその一つである。

以上のような三カ国におけるアーカイブズへの対応の違いは、現在も民間所在資料や地方公共団体の公文書に対する対応において大きな相違点となっている。例えば東寺百合文書など、近年、文化財保護法のもとでアーカイブズが管理される事例も見られる。しかし、こうした事例は極めて限られたアーカイブズを対象にしているに過ぎず、より普遍的で恒常的な施策が求められる。申請者は、現代のイタリアにおける文書保護局の活動についてすでに紹介しているが、この機関の成立とその後の展開について具体的な検討を行い、社会的な仕組みなども踏まえた研究を行うことが、日本のアーカイブズの管理制度の整備と今後の発展に益するものとする。また、日本国外に存在する文書群の中で最大級の物量をもつマレガ文書の整理・保存を主目的とした、バチカンと人間文化研究機構(代表機関国文学研究資料館)調査研究を進めた。さらに研究を深化させ、このマレガ文書の伝来と管理の実態を本研究の一事例として取り上げることで、単にイタリアの仕組みを日本に紹介するに留まらない研究となる。ポイントは、なぜマレガ神父が1930年代に豊後国臼杵藩の文書を収集したのかという問題である。当時のマレガ神父は30歳半ば、イタリアで神学博士号を取得していた。当時、江戸時代のいわば庶民生活レベルの古文書への関心は、国内では極めて低かった。彼の収集や管理、さらにバチカンに送るといふ各行為の分析を通して、マレガ神父や文書を受け入れる側の双方の関心を明らかにしたい。こうした分析によって、当時のイタリアやバチカンにおける記録に対する認識を検討し、アーカイブズに関する取り組みを具体的なレベルで追究したい。

幸い、バチカン図書館所蔵のマレガ文書群には、近世日本の切支丹取り締まりに関する文書のみならず、神父自身が書き残したメモ書きやカタログが、またサレジオ大学には神父自身の書簡等のアーカイブズが残されており、多くの事実関係を明らかにできる。

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか 本研究では、まず民間所在のアーカイブズへの保護が制度・法律的に確立されたイタリアの1930年代の状況やバチカンの間で行われたアーカイブズ保護を巡る協力関係、そして戦後における発展について分析を進める。次に、日本の戦前戦後期におけるアーカイブズ管理の方針、特に民間に所在していた旧体制下で作成された文書の管理・保護について分析する。この文脈における一事例として、マレガ神父が収集した文書についてイタリア語で書き残した記録や、簡易目録ノートの内容分析を行う。この分析を通して、マレガ神父が収集した文書を整理した基準や、バチカンへ送付し、バチカンが受け入れた理由を明らかにする。これにより、当時の日本・イタリア・バチカンにおけるアーカイブズ管理の一事例として位置付け、各国のアーカイブズに対する認識や具体的な取り組みを具体化する。

先に見たように、イタリアやバチカンでは、1930年代に民間所在資料や地方公共団体の公文書の保護が確立され、両国間でのアーカイブズ管理における協力関係も開始された。しかし、両国それぞれの取り組みについては、個々の研究があるものの、協力関係について書かれた関連研究が乏しいため、この点についても明らかにする。戦後、国と地方公共団体や各種民間団体との関係は、ファシズム期のように従属的で強圧的ではなく、保護に関する権利と義務の付与を通じ、共存し、協調して取り組む形へと変化させ、豊かなアーカイブズ遺産が現代に受け継がれている。

日本も戦後ようやく保護の方向性を取り始めたが、制度的な差異は歴然としており、イタリアやバチカンの保護体制が確立された経緯や制度面の内、現在の日本における保護体制に資する形でも本研究を進めていく。

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義 イタリアは、都市国家の伝統を受け継ぎ、地域ごとに統一前の国家の首都や主要都市が存在し、その伝統が息づいている。その影響は所蔵するアーカイブズにも及び、旧国家のものだけでなく、世界でも有数の民間所在資料が存在し、国が率先して保護や調査を行う法制度が整っている。またバチカンにも旧教皇領関連や、修道会・各地の修道院など宗務団体において、多言語で作成された文書が多数保存されている。しかし、日本も何世紀もの間、藩を基盤とし、地方の自立性の強い領主制の下、運営されてきた歴史をもつ。現存する日本の民間所在資料の数は、世界的にも群を抜くもので、村によっては数万点もの資料が受け継がれている。しかし、法体系や制度設計が十分に整備されていないため、散逸や売却だけでなく、災害など不定期に起こりうる事態にも非常に脆弱な状態に置かれている。この点でも日本とイタリアは、災害大国という共通点があり、災害時のアーカイブズの保護制度が整っていることから、参考にすべき事柄は非常に多い。

またマレガ文書において、これまでにないほど大量かつ体系的な前近代のキリスト教関係の古文書が発見された背景には、マレガ神父の収集に賭ける情熱のみならず、アーカイブズを巡る社会的背景が深く影響していることが記録・収集文書から読み取れる。文書群は白桦藩時代の文書管理秩序や神父が資料を利用していた秩序を伝えており、学術的価値がきわめて高い。したがって、本研究で一事例として取り上げることで、国を跨いだ制度比較に新規性と発展性をもたらす。

現在、日本では、新しい国立公文書館を設置するために各国の事情調査などが行われている。申請者もイタリアの事情について、情報を提供し、内閣府による現地調査に同行し、調査報告書の作成において監修も行った。イタリア独自の民間所在資料や地方公共団体の公文書を保護する事情についても盛り込んだが、制度設計の観点からは十分なものとは言えない。本研究は、まさに時宜を得たものであり、現代日本の文書管理にも貢献可能である。イタリア・バチカン・日本の三カ国における民間所在資料や地方公共団体の公文書管理の比較に留まらず、日本において記憶や記録資料を保護する制度設計に反映可能であり、資料管理において非常に重要な研究となる。

2. 研究の目的

本研究は、民間所在資料や地方公共団体の公文書の保護において転機となった第二次世界大戦前後のイタリア、バチカンでのアーカイブズ管理の施策・実状を明らかにし、戦前、同種のアーカイブズ保護の施策が進展しなかった日本との比較を行う。イタリアでは1939年、国の公文書以外の保護を担当する文書保護局が設立され、バチカンでも所蔵アーカイブズの大規模な調査が行われた。一方で、同時代の日本では同種のアーカイブズが散逸・売却されていた。イタリア人宣教師であるマレガ神父が17～19世紀の豊後切支丹文書1万数千点を収集・研究した事例もその一つで、同文書は現在バチカンで保存されている。日本、イタリア、バチカンにおけるアーカイブズ保護の施策を、マレガ文書の事例を交えて比較・検討することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

20世紀半ばの日本、イタリア、バチカンにおける民間所在や非国有アーカイブズ管理の施策や認識を理解するためには、各国に関する個別の先行研究の成果を取りまとめた上で、各国間での接点を見出し、相互関係を明らかにする必要がある。さらにマレガ文書内に残された、マレガ個人の記録や足跡などを読み解くことで、三カ国にまたがって活動しながら、古文書の収集や整理、保存にあたった事例を、大きな時代的な文脈の中で理解することが可能となる。こうして、民間所在や非国有アーカイブズの管理における先進的な理念や制度について明確化されるだけでなく、マレガ神父が取った文書群の管理と分類における判断基準や階層的構造を明確にすることも可能となる。この結果は、資料集やガイドなどにも反映する。

4. 研究成果

イタリア統一後から、フランス革命以前から存在していた旧体制国家で作成された膨大なアーカイブズを含む施策が討議された。歴史的に重要な国有アーカイブズに関しては、全国に複数設置された国立文書館で保存・活用がなされることとなった。しかし、各地に所蔵された非国有アーカイブズに関しては、具体的な施策が練られなかった。

第一次世界大戦等を経て、イタリア統一期前後のアーカイブズが危機的状況に至った1939年に非国有アーカイブズの監理を担当する文書保護局が各地に設置された。これまでの先行研究

では、文書保護局の活動が具現化するのには、第二次世界大戦の後とされてきた。実証的な研究や、具体的な事例にも乏しい状況であり、本研究では、第二次世界大戦中に設立された同局の活動について、一次史料を基に明らかにした。

第二次世界大戦中に設立されたばかりの文書保護局は、各地の重要なアーカイブズに対する保護や疎開の活動に従事していた。また、当時は、各地に設立された国立文書館の体制を一層強化するため、国立文書館の分館の設置準備が進められていた。その際、人材の選抜や調整なども文書保護局が積極的に関わっていた。また、戦争で被災する可能性のあるアーカイブズの疎開などにも従事した。

イタリア王国と教皇庁は、統一期のローマ併合を巡る紛争の影響などから国家を相互に承認していなかったが、統一直後から教皇庁の各部局のアーカイブズの調査や整理は行われていた。また、多数の教皇庁関係者がイタリアの「古文書学校」に通学し、パチカン側に古文書学校が設立されると、イタリア側からも教壇に立つ者が現れるなど、早くから交流が存在した。1929年になってイタリア王国とローマ教皇庁との間でラテラノ条約が結ばれ、国家を相互承認し、パチカン市国が成立した。この条約の一環で政教協約（コンコルダート）が結ばれ、第40条でパチカンの古文書学・公文書学々校の卒業証書がイタリア王国のものと同等の効力を認められるようになるのである。

第二次世界大戦後は、多くのアーキビストが文書保護局にもかかわることとなり、各地域で歴史的に重要な非国有アーカイブズの調査を展開する。こうした人々が国立文書館を含めた20世紀後半のアーカイブズ行政を牽引することとなるのである。

日本にも明治以来、膨大な数の民間所在資料が残されていたが、その保護を巡る施策が行われなかった。そうした中で、第二次世界大戦前後に日本に滞在したイタリア人宣教師マリオ・マレガによる資料収集と研究活動が行われていた。彼は、江戸時代の臼杵藩で作成された藩庁文書を中心として、当時民間所在資料となっていたキリスト教の禁教やキリシタンの末裔を管理する資料類を収集し、研究を行い、戦後にパチカンへ向けて送付した。1953年の送付直前にパチカンの高位聖職者とのやり取りも行われている形跡が見られ、その中で当時の日本の民間所在資料に関する記述も見られる。マレガが行った研究とも深く関わる内容であることから、その内容と状況について明らかにした。また、GHQで日本国内の宗務に関する実務を担当する人物とマレガとの交流も見られることが明らかになった。1951年には、文部省史料館が設立され、本格的な民間所在資料の保護施策が開始される。この時期、マレガと史料館との接点も見られることから、マレガが収集した資料の送付と文部省史料館の設立との関係については、今後の研究対象としたい。

さらに、本研究では、研究対象とする20世紀以前から現在に至るまでの長期の視点でも民間所在資料に関わる制度や政策について明らかにした。ヨーロッパの近世期に端を発する集約的な情報管理の歴史を経て、近代的なアーカイブズ管理やアーキビスト養成の起源に至る流れについても明らかにした。

また、現代のイタリアで活動しているアーキビスト等を招聘することにより、それらの施策がどう現代に活用されているのかも明らかにした（新型コロナウイルスが流行していた際もウェビナー等を活動し、知見の吸収と普及に努めた）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 1
2. 論文標題 「マレガ神父収集豊後切支丹史料のバチカン図書館への送付に関する考察 現状と課題」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」若手研究者シンポジウム 在外資料がひろげる日本研究 成果報告書』	6. 最初と最後の頁 33～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 湯上 良	4. 巻 26
2. 論文標題 「マレガ神父の生家がみつかる」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『史料館研究紀要』	6. 最初と最後の頁 12～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 湯上 良	4. 巻 34
2. 論文標題 「ヨーロッパにおける中近世アーカイブズに関する近年の研究動向」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『アーカイブズ学研究』	6. 最初と最後の頁 76～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32239/archivalscience.34.0_76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ryo YUGAMI	4. 巻 44
2. 論文標題 Il fondo Marega e i suoi scritti	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Lucinis	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 66
2. 論文標題 戦時のアーカイブズの保護・疎開 第二次世界大戦期のイタリア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学習院大学文学部 研究年報	6. 最初と最後の頁 229-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良 (訳)、チェーザレ・パシーニ	4. 巻 1
2. 論文標題 パチカン図書館所蔵のマレガ資料：過去から未来へ人々の間に架け橋を築く	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『マレガ収集日本資料の発見と豊後キリシタン研究の新成果』予稿集	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 湯上 良 (訳)、チェーザレ・パシーニ	4. 巻 1
2. 論文標題 教皇庁パチカン図書館の「マレガ資料」 過去から未来へ人々をつなぐ架け橋	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分・長崎交流講座『ヨーロッパとアジアの風がふくところ』予稿集	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 湯上 良 (訳)、ディアーナ・マルタ・トッカフォンディ	4. 巻 1
2. 論文標題 文書保護局における近年の改革後のアーカイブズと図書館の保護	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『民間史料保存におけるアーキビストと司書』予稿集	6. 最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 65
2. 論文標題 近世後期のヨーロッパにおける情報管理 イングランド、プロイセン、ヴェネツィアにおける税務情報の管理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学習院大学文学部 研究年報	6. 最初と最後の頁 67-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 28
2. 論文標題 イタリア統一前後におけるアーキビスト - 制度の確立と理論的發展 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 30-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32239/archivalscience.28.0_30	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 9月18日
2. 論文標題 記憶伝える文書管理制度を	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 410
2. 論文標題 イタリア史研究者がのぞき見た日本史と資料の世界	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地中海学会 月報	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 47
2. 論文標題 統制と文書保護から「マレガ文書」の基層を探る	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国文研ニュース	6. 最初と最後の頁 6 - 7頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良	4. 巻 2号
2. 論文標題 ローマで日本の古文書を共有 / 活用する - マレガプロジェクト講演会・くずし字講座	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・ニューズレター『きざし』	6. 最初と最後の頁 7頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上 良 (訳)	4. 巻 1
2. 論文標題 日本の各学術機関との共同研究・技術交流プロジェクト - マレガ収集文書内の近世日本語文書における管理・保存作業について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害国におけるアーカイブズ保存のこれから 技術交流・危機管理から地方再生へ	6. 最初と最後の頁 29 - 37頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 湯上 良 (訳)	4. 巻 1
2. 論文標題 イタリア国立アーカイブズ・図書資料保存修復中央機構	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害国におけるアーカイブズ保存のこれから 技術交流・危機管理から地方再生へ	6. 最初と最後の頁 45 - 49頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 湯上 良(訳)	4. 巻 1
2. 論文標題 文書館・図書館での緊急事態への対処	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害国におけるアーカイブズ保存のこれから 技術交流・危機管理から地方再生へ	6. 最初と最後の頁 51 - 61頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計17件(うち招待講演 7件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 「第二次世界大戦前後の日伊における民間所在資料の保護 研究の現状と展望 」
3. 学会等名 『イタリア近現代史研究会 第347回例会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 「マレガ神父収集豊後切支丹史料のバチカン図書館への送付に関する考察 現状と課題 」
3. 学会等名 『人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」若手研究者シンポジウム在外資料がひろげる日本研究』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 サレジオ大学所蔵マレガ神父関連資料の構造と研究
3. 学会等名 マレガ・プロジェクトZoom研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 湯上 良、クラウディア・サルミーニ
2. 発表標題 総督宮殿とフラーリ教会 - ヴェネツィアにおける記録 -
3. 学会等名 西洋アーカイブズ史ウェブセミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 湯上 良、アンヘラ・ヌニェス=ガイタン
2. 発表標題 パチカン図書館とマレガ・プロジェクト
3. 学会等名 西洋アーカイブズ史ウェブセミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 湯上 良、ルーカ・ファルディ
2. 発表標題 最重要歴史的価値宣言の業務プロセス
3. 学会等名 西洋アーカイブズ史ウェブセミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 湯上 良、フィリッポ・デ=ヴィーヴォ
2. 発表標題 ヨーロッパにおける中近世の記録史料研究の最新動向
3. 学会等名 西洋アーカイブズ史ウェブセミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 サレジオ大学所蔵マレガ神父関連資料とマレガ神父の研究について
3. 学会等名 マレガ研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 YUGAMI Ryo
2. 発表標題 Il Fondo Marega della Biblioteca Vaticana: che cosa raccontano i documenti raccolti da Don Marega
3. 学会等名 In memoria di Don Mario Marega (1902-1978), Da Gorizia al Giappone Don Mario Marega tra memorie storiche e radici culturali (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 湯上 良(訳)、ディアーナ・マルタ・トッカフォンディ
2. 発表標題 文書保護局における近年の改革後のアーカイブズと図書館の保護
3. 学会等名 民間史料保存におけるアーキビストと司書(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見 純(訳)、アンナ・ニコロ
2. 発表標題 アーカイブズと図書館の保護活動における接点: トスカーナ文書図書保護局における実態
3. 学会等名 民間史料保存におけるアーキビストと司書(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 YUGAMI Ryo
2. 発表標題 Documenti sulla storia della cristianita'; in terra di missione: il Progetto Marega della Biblioteca Apostolica Vaticana
3. 学会等名 Mario Marega, testimone del '900 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯上 良(訳)、クラウディア・サルミーニ
2. 発表標題 イタリアの地域持続におけるアーカイブズやアーキビストの役割
3. 学会等名 地域持続におけるアーカイブズやアーキビスト等の果たす役割 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 近世後期の情報管理 - ヴェネツィアとヨーロッパとの比較 -
3. 学会等名 イタリア言語・文化研究会 例会 (第156回) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 記録を守り、記憶を伝えるイタリア
3. 学会等名 イタリア研究会 第456回例会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 講演会「禁書 - ゲーテンベルクから百科全書まで」
3. 学会等名 イタリア・ブックフェア2018 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯上 良
2. 発表標題 La tutela dei documenti storici in Giappone
3. 学会等名 Tra Italia e Giappone Tutela e conservazione documentaria: due mondi a confronto (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 下重 直樹、湯上 良	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 248
3. 書名 アーキビストとしてはたらく	

1. 著者名 大友一雄, 太田尚宏編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 角川文化財団、国文学研究資料館	5. 総ページ数 531
3. 書名 『パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料の総合的研究』	

1. 著者名 湯上 良(訳)、マッテオ・ダリオ = パオルッチ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 鹿島出版会	5. 総ページ数 536
3. 書名 イタリアの中世都市 - アゾロの建築から領域まで -	

1. 著者名 湯上 良(訳)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 204
3. 書名 禁書 - グーテンベルクから百科全書まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>戦時のアーカイブズの保護・疎開 第二次世界大戦期のイタリア https://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/top/publication/KE_66/KE_66_018.pdf 民間史料保存におけるアーキビストと司書 https://www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/2019,%201116%20Volantino.pdf 近世後期のヨーロッパにおける情報管理 イングランド、プロイセン、ヴェネツィアにおける税務情報の管理 http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/top/publication/ 地域持続におけるアーカイブズやアーキビスト等の果たす役割 http://www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/2018,%201208%20TJP%201116.pdf</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	インフェリーゼ マリオ (INFELISE Mario)	ヴェネツィア大学・教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	太田 尚宏 (OTA Naohiro) (40321666)	人間文化研究機構国文学研究資料館・准教授	
研究協力者	大友 一雄 (OTOMO Kazuo) (30169007)	人間文化研究機構国文学研究資料館・教授	
研究協力者	小関 悠一郎 (KOSEKI Yuichiro) (20636071)	千葉大学・准教授	
研究協力者	サルデッリ マルチェッロ (SARDELLI Marcello)	教皇庁立サレジオ大学・図書館・館長	
研究協力者	サルミーニ クラウディア (SALMINI Claudia)	ヴェネト文書図書保護局	
研究協力者	高見 純 (TAKAMI Jyun) (40825973)	拓殖大学・准教授	
研究協力者	デ・ヴィーヴォ フィリッポ (DE VIVO Filippo)	ロンドン大学・教授	
研究協力者	トッカフォンディ ディアーナ・マルタ (TOCCAFONDI Diana Marta)	トスカーナ文書図書保護局・局長	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ニコロ アンナ (NICOLO' Anna)	トスカーナ文書図書保護局	
研究協力者	ヌニェス＝ガイタン アンヘラ (NUNEZ-GAITAN Angela)	教皇庁バチカン図書館・修復室長	
研究協力者	パシーニ チェーザレ (PASINI Cesare)	教皇庁バチカン図書館・館長	
研究協力者	ファルディ ルーカ (FALDI Luca)	トスカーナ文書図書保護局・副局長	
研究協力者	プレスニカー マルコ (PLESNICAR Marco)	国立ゴリツィア文書館・館長	
研究協力者	松本 純子 (MATSUMOTO Jyunko)	文化庁	
研究協力者	マントヴァーニ マウロ (MANTOVANI Mauro)	教皇庁立サレジオ大学・学長	
研究協力者	渡辺 浩一 (WATANABE Koichi) (00201179)	人間文化研究機構国文学研究資料館・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 民間史料保存におけるアーキビストと司書	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 地域持続におけるアーカイブズやアーキビスト等の果たす役割	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Tra Italia e Giappone Tutela e conservazione documentaria: due mondi a confronto	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
バチカン	教皇庁立バチカン図書館	教皇庁立サレジオ大学		
イタリア	トスカーナ文書・図書保護局	ヴェネト文書・図書保護局	ルチニョコ文化センター	
英国	ロンドン大学			
イタリア	トスカーナ文書・図書保護局	ヴェネト文書・図書保護局	国立ゴリツィア文書館	他1機関